

略記

遠江國一宮 小國神社



遠江國一宮 小國神社社務所

〒437-0226 静岡県周智郡森町一宮3956番地の1
TEL.0538-89-7302 FAX.0538-89-7367
URL : <http://www.okunijinja.or.jp/>
okunijinja@technowave.ne.jp



※東名袋井インターより車で約20分、JR掛川駅より約30分



宝 物

徳川家康公奉納の三条小鍛冶宗近銘の太刀二振、大身槍一振。また、本殿裏の経塚より出土した古鏡・経筒の他、遠州報國隊の連判状・感状等数点あり。

撰 末 社

◎並 宮

御祭神は伊邪那美命、事解男命、速玉男命の熊野三神である。明治十五年以前は本殿玉垣内にあり、並座を以て並宮と称し、祭典日、社殿の結構、祭典の式に至るまで古より本社に準じていた。炎上後は境内社の八王子社に合祀されていたが、明治百年を記念し、昭和四十三年十月に玉垣内旧社地に復興造営された。

◎塩井神社

二月十五日が例祭日で、塩筒老命を祀る。一宮山の伏間地区に鎮座する。古来より社殿の側より塩分の含まれた霊水が湧き出し、病氣平癒の御霊験（特に胃腸病）があり、遠近より多くの参拝者が訪れる。

◎全国一宮 等 合 殿 社

四月八日が例祭日。延宝八年の社記や明治初期の神社明細帳によると、全国一の宮の御祭神を主として七十三柱・五十余社の末社が境内外に祀られていた。なかには長年の風雨に晒されて腐朽した社殿、明治十五年の火災により消失した社殿があり、仮に境内末社八王子社に合祀されていた。平成元年十二月十八日、三間社流造りの社殿を新築復興し、旧社領時代の末社を合祀した。

境内地及び社殿

中古以来社領は、一宮の上の郷・下の郷、一宮以外の円田に藺田郷、森の太田郷・天宮郷の五ヶ郷三百六十町を領した。江戸時代には徳川氏より五百九十石の朱印を賜り、東西一里南北一里半の境内を領した（社記及び諸社寺御朱印御条目枢要摘書）。明治四年の土地後は、一部を一宮村に払い下げられたが、社殿近接地は、一宮村より譲り受け境内地となった。現在、境内地は三十万坪に及ぶ。

本殿は明治十五年の火災後、明治十九年に国費を以て再建された。以前の三分の一の規模となったが、間口及び奥行三間二尺七寸・高さ四丈三尺である。本殿の他末社・建造物等は、五十余数を具備する。境内一帯には丈余の神代杉が鬱蒼として繁り、勅使参道跡も現存する。境内を流れる宮川の清流と風声相和し、全境内清寂の極致を感じる。

本 宮 山

本社の北約六キロメートルにあり、標高五一メートルの山頂には奥宮として奥磐戸神社がある。荒魂を祀り、一月六日が例祭、五月六日が青葉祭である。遠江国の中央に位置し東西南北国中を一望の下に聚め、天竜川・遠州灘の南景は格別である。

社 職

平安時代中期の永保二年（一〇八二）に、神祇官から小國神社神主に清原則房が補任された（朝野群載）。小國家系譜によると、清原氏は清和源氏よりでて当国に住し、小國神社の神主になったとある。江戸時代の神主の小國重年は、近世国学者として名高い。延宝八年の社記によると、社家三十二人・舞楽人・社僧等は、小國神主の支配のもとに奉仕していた。各々の社家の後裔は、今に現存している。

御由緒の概略

神社名 小國神社おくにじんじや

鎮座地 静岡県周智郡森町一宮三九五六番地の一

御祭神 大己貴命おおなむちのみこと

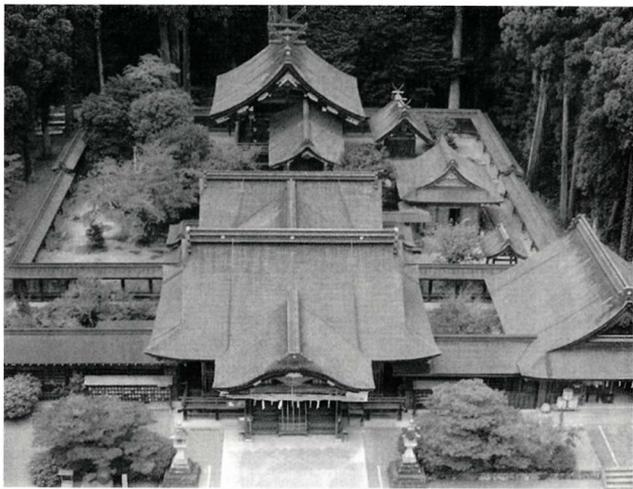
御神徳

すざのおのみこと須佐之男命の御子にして、父神の命により豊葦原の国を開発し稲穂の稔る瑞穂の国に造り上げ、天孫に国土を奉った大功を称えておおくぬしのみこと大国主命、くにつくりのおおなみ国作之大神、おおなむじのかみ大穴牟遲神と称える。また、農業・山林・鉱業・縁結び・医薬禁厭の法を授け給う徳を称えておおのぬしのかみ大物主神、うつくしまのかみ宇都志国玉神、おおたまのかみ大国玉神と称える。また、艱難辛苦の修養を積まれ統治者となられ、国中の悪神を平定せられた質実剛健と勇気を称えてあしはらのしのおのみこと葦原醜男命、やちほじのみこと八千矛命と申し、尊貴を称えておおなむちのみこと大己貴命と申す。国土開発・福德・縁結び・山林・農業・医薬・知徳剛健等の守護神と敬われ、御神徳は極めて高い（古事記・日本書紀等）。また、当社を小國神社と申すのは、出雲の大本宮に対する遠江国地方の呼称であり、古来より許当麻知神社（願い事を待つ意）、事任神社（願い事のまに叶う意）とも称されてきた。

御由来

創祀は神代と伝えられ、上代の事で詳らかではないが延宝八年（一六八〇）の社記によれば、人皇第二十九代欽明天皇の御代十六年（五五五）二月十八日に本宮峯（本宮山）に御神靈が出現し鎮斎せられた。

後、山麓約六キロメートルの現在地に都より勅使が差遣せられ、社殿を造営し、正一位の神階を授けられた（社記）。爾来、年々奉幣に預かり、文武天皇大宝元年（七〇一）二月十八日に勅使が奉幣し、特に十二段の舞樂を奉奏せられた（社記）。仁明天皇承和七年（八四〇）六月二十四日従五位下の神階を授けられ（続日本後記）、清和天皇貞観二年（八六〇）正月二十七日には従四位下（日本三代実録）、同十六年（八七四）二月二十三日には従四位上を加えられ（日本三代実録）、第六十代醍醐天皇の延喜七年（九〇七）に勅して社殿を改造せしめられ（社記）、延喜式内社に列せられた（延喜式）。下つて第九十六代後醍醐天皇の元弘・建武の変以来、勅使参向が絶え、神主が代わって其の式を行い、戦乱が相次ぐ室町時代に至つても神事祭祀を欠くことなく奉仕し、朝野の崇敬が極めて篤く、近世に至る（社記）。



夢に感じ、子息千松麻呂を人質として徳川氏に訴えた。家康公は神主に命じて御神靈を別所に遷し、願文と三条小鍛冶宗近作の太刀を奉り、戦勝を祈願した後に、社頭に火を放ち全部の社殿を焼失した。その

後、徳川方が勝を得て、天正三年（一五七五）家康公は家臣本多重次に命じて、先ず本社を造営、遷宮させ、次いで同十一年（一五八三）十二月七日天下平定の報賽として末社・拜殿・廻廊を造営、同十三年（一五八五）楼門を再建させた。慶長八年（一六〇三）八月二十八日家康公は更に社領として五百九十石の朱印を奉り、その後、元禄十年（一六九七）には將軍綱吉公が横須賀城主西尾隠岐守に命じて悉く社殿の改造をし、寛保元年（一七四二）將軍吉宗公より四百両の修復料を寄進された。

明治六年六月十三日に至って、国幣小社に列せられ、明治十五年三月八日再度の火災に遇い、本殿以下悉く失ってしまった。官命により再建の事となり、明治十九年に完成、九月二十五日遷座祭を執行する。終戦後は昔ながらに遠江國一宮として崇敬され現在に至っている（社記・徳川実紀）。

また、平成十五年九月十四日、秋篠宮文仁親王殿下同妃紀子殿下には、御親拝及び十二段舞樂を御覧になられ、平成十八年十一月八日には、神宮祭主池田厚子様が御参拝され、記念に菊花を御手植えされた。

祭典日

◎田遊祭 一月三日 創始は鎌倉時代といわれ、五穀豊穡・家畜安全を祈願する十二段の行事が執行される。（国選振の記録すべき無形民俗文化財）

◎手鉦始祭 一月十一日 建築・土木の安全祈願を墨打ち、手斧式を以て古式により奉仕する。

◎どんど焼祭 小正月過ぎの日曜日 境内神池（コトマチ池）前の焼納所で執行され、無病息災のおはたき餅が授与される。

◎御弓始祭 一月十七日 社前において、古儀により御弓始式を執り行う。式において射った矢は、魔除けとなると伝えられている。

◎厄除大祭 一月二十日～二月三日 厄年・黒星・八方塞の災厄除祈願を執り行い、特別な御守を授与します。

◎節分祭 二月節分の日 古来より伝わる追儺式による鬼追い、宝槌振り、豆撒き神事を年男年女役の百余名の奉仕者が開運厄除を祈願して執り行う。

◎初甲子祭 寒明け後の甲子の日大國主命の御縁日として、この日は特に福德・縁結びの御神徳があり、願い事がまに叶うと伝えられている。本殿巡りの初甲子神事が行なわれ参拝者で賑わう。

◎祈年祭 二月十八日 その年の豊穡と諸産業の繁栄を祈願する祭典が執行される。

◎例祭 四月十八日 御神霊が本宮峯（本宮山）に鎮齋された日であるとともに、勅使が参向し十二段の舞樂を奉奏された由緒深い日に例祭は齋行される。十八日に一番近い土曜日・日曜日には国の重要無形民俗文化財に指定されている十二段舞樂の奉奏があり、日曜日には神輿渡御の神幸祭が齋行される。

◎大祓式 六月三十日・十二月三十一日 日常生活において無意識のうちににおかした「罪」や「けがれ」を芽の輪神事がある六月の夏越大祓と十二月の師走大祓にて祓い、心身ともに清らかな姿に立ち返る神事である。

◎新嘗祭 十一月二十三日 収穫と繁栄に感謝する祭典で、二月の祈年祭とは対をなす。当日は近隣農家で収穫された米・野菜等の品評会、即売会もあつて境内も大いに賑わいを見せる。